



達谷窟毘沙門神楽の「御神楽」には平泉中生徒も参加し、練習の成果を披露



①_赤谷神楽(登米市石越)/②_中野神楽(栗原市栗駒)/③_各団体とも伝統を引き継ぎ熱心に練習を積み重ねており、その舞いは観客を魅了した



天の宇受売の命の華麗な舞い(岩戸開)



天照大御神を迎える場面(岩戸開)



秋空の下、金鶏山夜神楽の会場には大勢の観客が訪れた



迫力ある舞いに会場から大きな拍手が送られた(岩戸開)



迫真の演技で観客を魅了した達谷窟毘沙門神楽の「岩戸開」

voice



照井 幸子

達谷窟毘沙門神楽 代表

《Profile》1954年生まれ。父・幸男さんのそばで幼いころから神楽に親しみ、17歳で神楽を習う。後継者育成に力を注ぐ。

郷土芸能を継続させていくためには若い力が必要

若い世代の人たちが達谷窟毘沙門神楽に入ってきてくれたおかげで、組織の活性化につながりました。

達谷窟毘沙門神楽は町の無形民俗文化財に指定されていますが、そこがゴールではなく、いかに活動を継続させることができるかが重要だと思っています。そのためには若い力が必要です。神楽に慣れ親しんでもらえるように、今後も後継者育成に力を入れていきます。

voice

みんなに感謝し、これからも達谷窟毘沙門神楽を伝え継いでいきたい

昔は舞われていたが、今できる人がいないため舞われていない舞いがたくさんあり、伝え継ぐことの大切さを実感しています。

今、達谷窟毘沙門神楽があるのは、再興した先人たちであり、師匠であり、伝え継いできた先輩たちであり、今いるメンバーの頑張りであると思います。その陰には、家族や地域の人たちの支えがありました。みんなに感謝し、これからも達谷窟毘沙門神楽を伝え継いで行きたいです。



照井 久美

達谷窟毘沙門神楽 胴取り

《Profile》1981年生まれ。86年に伝承活動が始まった際の第1期生で幼稚園時代から神楽を習う。祖父・幸男さんから5年前に胴取りを引き継ぐ。

郷土芸能は平泉が誇る文化であり、地域の宝

平泉の文化遺産が世界遺産に登録されて今年で5年目となる。町内にある数多くの資産が、時を超えて受け継がれてきた理由は、その資産が持つ価値、重要性を地域の人たちが理解していたからではないだろうか。

少子高齢化による後継者不足、娯楽の多様化に伴う関心の低下など、郷土芸能が置かれている状況は依然として厳しい。

【特集】達谷窟毘沙門神楽—伝統を紡ぐ人々— 終わり

そのような中、伝承していくためには、平泉の文化遺産と同様に、郷土芸能が持つ尊さ、魅力を改めて地域の人たちが理解する必要がある。価値の共有化を図ることで伝統文化を紡ぐことができるはずだ。

神楽をはじめ郷土芸能は長い歴史を重ねて育んだ平泉が誇る文化であり、地域の宝である。紡いでいこう、次の世代へ。

最終章

文化を次世代に残す責任
郷土芸能の価値

郷土芸能は後継者不足、生活環境の変化などが原因で厳しい現状にある。郷土芸能にはもう価値がないのだろうか。いや、郷土芸能には観客を魅了し、地域を盛り上げる力が確かにある。親から子へ、子から孫へ、脈々と紡がれてきた伝統の舞い。だからこそ現代に生きる私たちは伝統ある地域の文化を次世代に残す責任がある。

演じる人も見る人も大きな満足感に浸れる

10月22日、平泉文化遺産センターで金鶏山夜神楽が開催された。南部神楽の流れをくむ岩手県南、宮城県北の10団体が伝統の舞いを披露し、約300人の観客を魅了した。町内からは達谷窟毘沙門神楽が出演。華麗な衣装に身を包んだ各団体の舞い手たちが舞台狭しと熱演を繰り広げ、会場は演目が終わるたびに拍手に包まれていた。演じる人も見る人も大きな満足感に浸れるのが、神楽の醍醐味である。

伝承活動を続けたことが後継者確保につながった

達谷窟毘沙門神楽には若い世代の人たちが入ってきており、

伝統の舞いがきちんと受け継がれている。この若い世代は幼稚園や中学校時代に神楽を習っていた世代である。故・照井幸男さんが行ってきた子どもたちへの伝承活動という種まきが、ようやく実を結んだ形だ。同神楽の代表である照井幸子さんは、若い世代に自分たちが習ったことを全て伝えていきたい。私たちの年代の人たちで『やれるところまでやろう』と約束している。年配の人でも裏方の仕事など、できることがあるはず」と笑顔で話す。そして「私たちが一生懸命神楽を残していきたいと考えていても、みんなに神楽を知ってもらう機会がないと意味がない。そのため金鶏山夜神楽のように、発表する場があつてとてもうれしい」と言葉を弾ませる。